

特集：国際学会参加報告

第 47 回米国細胞生物学会 Annual Meeting に参加して

田中 大輔（筑波大学 生命環境科学研究科博士後期課程 3 年）

2007 年 12 月 1 日～5 日の間、ワシントン DC にて行われた米国細胞生物学会 (American Society for Cell Biology) の Annual Meeting に参加した。

今回は、ポスター形式で発表したが、演題数はポスターのみで 3500 にも上り、3 日間×2 回の入れ替わりで発表した。他にも、各日で数多くの口頭発表が行われ、また演題の分野は核酸・オルガネラレベルから幹細胞・病態レベル、さらには新技術の発表までと多岐にわたり、合計観客数も 3～5 万人とちょうど日本の分子生物学会と同じような規模・形式の学会であった。

発表自体は、指定された日は朝から晩までポスターを掲示しておき、その中の 2 時間程度だけポスターの前に立ち、発表内容に興味を持っていただいた方との質疑応答を行うという形であった。私は、ミトコンドリア疾患モデルマウスを用いた行動・学習・記憶解析を主題として発表したが、特にモデルマウスのユニークな特性および記憶解析に興味をもっていたようで、そのことに関する質問が多かった。質問者とのコミュニケーション

は当然英語にて行った。英語が苦手なため、発表に関して多少なりとも不安があったが、片言の単語でも最低限伝えたいことはおむね伝えられ、有意義なディスカッションができたという実感が得られた。その点に関しては『なんとかなるもの』という感想と、ほんの少しの自信を持つことができたように思う。

学会発表が目的の海外渡航ではあったが、学会会場だけでなく食事などの日常生活においても、普段とは異なる文化・語学を体感することができたので、それらも含めて国際学会への参加は大きな意味があると感じた。今後、このような海外での学会発表に参加できる機会があるのなら、是非ともまた参加したいと考えている。

Communicated by Jun-ichi Hayashi, Received April 25, 2008.